

## 研究会「帝国へのまなざし」概要

- 主催：新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第4班（帝国論）
- 日時：2011年1月22日（土）13時45分～18時
- 場所：淡路夢舞台国際会議場 304室
- 研究会の趣旨：帝国でもなく、植民地でもなかった地域から、近世・近代の「帝国」とは何かを検討する。今回は、イラン、シヤム、清朝中国という、アジアの3つの地域を取り上げるが、19世紀には、これらの地域は「帝国」の介入を受けながらも、当時の「地域大国」とも呼びうる重要な地位を占めていた。本研究会では、アジアの「地域大国」とその上層部（国王・官僚）による「帝国」に対する当時のまなざし・見解を、それぞれの地域の一次史料を用いて比較検討する。
- プログラム：
  - 守川知子（北海道大学）「イラン国王の欧州紀行」
  - 小泉順子（京都大学）「シヤム国王の欧州紀行」
  - 岡本隆司（京都府立大学）「清朝官人のイギリス紀行」
  - コメンテーター：秋田茂（大阪大学）

守川報告では、イラン国王の旅行記を手がかりに、国王自身の帝国に対する眼差しが検討された。ガージャール朝の第4代国王ナーセロッディーン・シャー（在位1848～96年）は無類の旅行好きであり、欧州も3度訪問している。今回は、初めての欧州訪問となった1873年の旅行が具体的事例として紹介された。

19世紀のイランは、大国のイニシアティブによって国境が画定され、それと同時に、外部より先進的な技術が入ってきた時期であった。イラン自身は大国としての自負を有していたものの、国境に対する認識はあまりなく、鉄道敷設権や鉱山採掘権といった国益に直結する権利も譲り渡す。最終的にはナーセロッディーン・シャーは革命家によって暗殺されてしまう。

ナーセロッディーン・シャーは、国内での出版を前提として旅行の記録を書き留め、帰国後、それを旅行記として出版した。国王や高官からの命令を受けた官僚の手による「官命旅行記」も多数執筆されていることからわかるように、当時は旅行記ブームの時代であり、彼がそうした雰囲気の中かで自著を出版させたといえるが、彼自身が旅行記ブームを煽ったという側面も見逃してはならない。

ロシア、ドイツ、イギリス、フランス、オーストリアなどを歴訪したナーセロッディーン・シャーの旅行記には、各国元首との面会の様子は描かれるものの、政治的な要素は殆どなく、土地の印象や人々に対する感想などが極めて率直な筆致で書かれている。例えば、ドイツの人々は「無礼」であり、ベルギー王国は「とても自由で気まま」であり、イギリス人は「偉大な民族」である、といった描写が挙げられる。また、博物館や動物園が大の

お気に入りであり、帰国後、イランにも同種の施設を導入したほどである。

以上の報告に対し、ナーセロディーンが欧州各国の首脳と会見した際、国家間交渉のようなことは行われていたのかとの質問が出たが、ナーセロディーンの付き合い方は、あくまで社交の性格が強かったと思われるが、そのようにして形成された欧州でのネットワークがそれなりの意味を持っていたのではないかと、との回答であった。また、旅行記は誰に向けて書かれたのか、との問いに対し、国王は常に国内での出版を前提として旅行記を執筆しており、国民に対する「啓蒙」が意図されていたとの回答であった。国王の旅行団に関する質問については、基本的には宮廷の人間が国王に同行する形を取っていたが、資金が不足した時点で人員の一部を帰国させたり、場合によっては訪問国政府から資金を借りたりすることもあったとの回答であった。

小泉報告では、タイの独立を維持するうえで重要な役割を果たしたとされるチュラーロンコーン（ラーマ 5 世、在位 1868～1910 年）および、同国王の欧州旅行に焦点が当てられた。ラーマ 5 世は、計 7 回の外国旅行を行っているが、ここでは「シャム危機」（1893 年）後に行われた 1897 年の初めての欧州旅行が題材として取り上げられた。

シャム危機により、フランスがメコン東側一部を占有し、ラーオ人住民や無条約国人をフランス保護民として登録し領事裁判権等を享受させたため、タイ政府はそれを阻止するべくフランス政府と交渉を行い、1904 年によりやく一定の制限を課すことに至った。こうした文脈の下で行われた 1897 年の外遊は、対仏交渉など明確な目的を有する訪問であり、フランスでは 6 回の交渉が行われている。

ラーマ 5 世が執筆し今日公刊される記録は、正妻の一人に宛てた一種のラブレターともいえる書簡集であり、基本的には私的な性格を有するものであった。それによれば、同国王は教養人としての自負があり、欧州のアジアに対する「無知」に批判的な態度を取っていた。ラーマ 5 世は、敬虔な仏教徒であり、英語にも或る程度堪能であったと思われる。彼は、王家に関心を持ち、欧州各国の皇族・王国との信頼関係を構築することに腐心していた。ラーマ 5 世は欧州を理想化して見ることに批判的であったが、77 人の子供のうち男子については、その殆どをイギリスを中心に西欧やロシアに留学させていた。

B. アンダーソンの『想像の共同体』によれば、ラーマ 5 世は、子息の多くを欧州各国に送り込んで世界モデルの機微を学ばせ、王位を長子継承とする制度を導入し、タイを「文明化」した西欧の君主制と同列においたという。ただし、ラーマ 5 世は、イギリスやドイツの制度をそのまま採用するのではなく、オランダ領東インドやインド帝国などの植民地官僚国家をモデルにしたところもあり、近代化の推進者を自認していたとはいえ、欧州の制度をそのままコピーしたわけではなかったという。

以上の報告に対し、ラーマ 5 世の妻に宛てた書簡以外に記録は存在したかという質問が出された他、ラーマ 5 世は欧州に対する知識を豊富に有しており、国民統合の成功の度合いなど各国の統治状況を客観的に把握していたのではないかとといったコメントが出された。

これに対し報告者からは、ラーマ 5 世の外国訪問に関しては公式記録が存在するが、基本的に事実関係が記されているだけであり、政府が個々の行事をどう評価していたかについては記載がない、との回答があった。また、1907 年の 2 回目の欧州訪問に関しては娘宛ての書簡が出版されているものの、こちらについても政治交渉の具体的な中身は見えにくいという点が指摘された。

岡本報告では、清朝の駐英公使による記録に着目し、特に、1870 年代の同時期に赴任した 2 人の官人、郭嵩燾（かく・すうとう）と劉錫鴻（りゅう・せっこう）の出使日記が比較検討された。清朝官人の記録については既に分厚い先行研究が存在するものの、表面的な紹介にとどまっているものが多い。ここでは、2 人のヨーロッパ観をただ観察するのではなく、その背景にあった彼らの対中国観に焦点が当てられた。

郭嵩燾は『使西紀程』や『郭嵩燾日記』において、中国知識人の多くは、西洋は表面だけ優れていて根本は劣っていると認識しているが、実際には根本も優れていると述べる。郭嵩燾は、退廃した中国のアンチテーゼとして西洋を捉え、議会主義などは中国のモデルになり得ると主張したが、彼の著作は故国で批判を浴びた。彼は帰国した後、隠居してしまう。

劉錫鴻は郭嵩燾の副官であったが、郭嵩燾と対立したためドイツに転任した。その後、ドイツでも周りと対立したため、最終的には故国に召還された。劉錫鴻は『英朝私記』においてヨーロッパの優秀さを指摘しつつも、それを中国にそのまま導入するべきではないと主張した。彼は、中国もかつては優れていたものであり、中国自身の道・仁義を尊重すべきと述べた。彼によれば、ヨーロッパのそもそもの源は中国にあった。なお、劉錫鴻の日記には、通訳官が書いた記録を使用した部分があるので、分析には注意を要する。

以上の報告に対し、郭嵩燾や劉錫鴻の官人としての位置づけや外交を司る省庁の整備状況について質問が出されたところ、1870 年代における駐英公使の地位はあまり高くなかったが、20 世紀初頭には職業外交官としての位置づけが明確化されていったとの回答であった。外務省的な組織についても、最初からそのような機構が整備されていたわけではなく、1870 年代、80 年代は李鴻章が実質的に外交を取り仕切っていた。また、これらの官人が体制批判を行うことがあったかとの質問に対し、当時は君子あつての国家という認識が一般的であり、体制を批判するという発想は基本的になかったものの、理想的な統治形態に関するアイデアは個別に持っていたのではないかと、との回答であった。駐英公使の派遣団に通訳官等としてイギリス人が混じっていたことについては、時代が下るにつれ、外国人を外交団の一員として同行させることが問題視されるようになったと思われる、との回答であった。

以上の 3 報告に対し、秋田氏より以下のコメントがなされた。

今回の研究会では、イラン・タイ・中国の 3 カ国の事例が紹介され、それぞれの帝国に

対する眼差しが明らかにされたという点で興味深いものであったが、守川報告と岡本報告が 1870 年代、小泉報告が 1890 年代を対象としており、時期の違いに注意する必要がある。特に 1890 年代は露骨な帝国主義時代であり、列強のアフリカ分割や東アジア侵出が本格化した時期である。また、史料としては国王自身の記録と官吏の記録が用いられていたが、両者の質的な相違にも留意する必要があるだろう。今回の 3 報告では、いずれもヨーロッパ本国を訪問したケースが扱われていたが、日本の事例、例えば岩倉ミッションの分析との比較も興味深いと思われる。また、ヨーロッパ訪問の際、グローバルに展開する植民地帝国という認識がどの程度存在したのか、本国そのものに対する眼差しと帝国システムに対する眼差しがどの程度交差していたのか、という点も考えてみる必要がある。

また、フロアからは以下のようなコメントがなされた。

イラン国王の比較的のんびりした態度からは帝国主義時代における切迫感があまり感じられないが、逆に言えば、日本は他の国と比べて過敏に反応したのであり、日本が特殊であったと言えるのかもしれない。また、王族による外交は、当時のヨーロッパ的な感覚からいえば普通であり、イランやタイの欧州訪問はそれほど違和感をもって受け止められなかったと思われるが、中国については皇族自らが国外に出るという発想がなく、その点は他国と異なっていたと言える。さらに、イラン国王はウィーンで博覧会を見物しているが、当時は博覧会が諸帝国の力関係を可視化する機能を持ち始めた時期であり、それを目撃することによって帝国システムに対する認識が生じた可能性も考えられる。

(文責：福田 宏)